



TITLE:

計画8-6 屋久島における野生ニホンザルの猿害群の春・秋期の採食生態(VI 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

ヒル, デビッド

CITATION:

ヒル, デビッド. 計画8-6 屋久島における野生ニホンザルの猿害群の春・秋期の採食生態(VI 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 2001, 31: 140-140

ISSUE DATE:

2001-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165640>

RIGHT:

計画 8-6

屋久島における野生ニホンザルの猿害群の春・秋期の採食生態

デビッド・ヒル (サセックス大・生物科学)

屋久島では集落周辺の柑橘類果樹園での収穫期の猿害が深刻であるが、猿害のない時期の加害群の生態については、ほとんど知られていない。本研究は、集落周辺のサルの自然食物植物の利用可能性と、調査地域で遭遇するサルの群れの構成、行動や食性や利用地域についての予備的な調査を目的とし、猿害群の生態についての、より規模の大きな研究のための基礎とする予定である。

2000年の5月と8月の非収穫期に、収穫期には猿害の激しい永田集落周辺で、森林での自然のサルの食物の利用可能性を調査した。低地林でのサルの安定した食物供給源であるイチジク類2種は、*Ficus superba* (アコウ) が調査域に2本のみの稀な分布で、*F. erecta* (イヌビワ) は道路と沢沿いに分散して分布していた。西部地域での分布と比較するためには、さらに調査域を拡大する必要がある。調査中にサルとの遭遇はなかったので、群れの構成や食性については記録できなかった。サルの糞は確認したので、猿害の時期以外にこの地域を利用していることが示唆された。また、地域の農家より猿害情報を得、今後の調査計画について討議した。農家の印象では、サルは収穫期に果樹園付近に頻繁にくるようになるとのことだが、収穫期以外には果樹園での作業時間が少ないことを考えると、サルの行動を通年で調査しない限り結論はできない。来年度は猿害農園周辺でのサルの自然食物の利用可能性についての包括的な調査とサルの直接観察を計画している。

計画 8-7

青森県下北郡佐井村に生息する野生ニホンザルの生態調査と保護管理

鈴木克哉 (北海道大・文・地域システム)

近年、日本の各地でニホンザルの分布が人里にまで拡大し、甚大化する農業被害問題は、ニホンザルの保護管理を考える上で避けられない課題となっている。本研究では青森県下北半島佐井村に生息し、農業被害を発生させるニホンザル野生群 Y 群を対象に、現在の土地利用の季節変動を把握することを目的とした。これまでの調査で Y 群は 8~9 月には耕作地に、2~3 月には人工草地 (牧草地) など人為的環境を集中的に利用することが分かっている。そこで農作物収穫期以外の季節における Y 群の土地利用・行動の様子を明らかにすることを試みた。調査は 2000 年 5 月、7 月、11 月、12 月、1 月に行われた。群れを探索し発見した時点から、追跡しデータを収集した。群れを連続追跡できた期間は 5/7-16、11/10-16、12/24-29、1/20-29 である。7 月は耕作地で食痕等の形跡が見られたものの群れを発見することができなかった。調査の結果、群れを追跡・観察できた上記の期間は特別に食物資源を人為的環境に依存するような土地利用は見られなかった。これまでの結果と総合すると、Y 群は年間を通して行動圏では大きな変化は見られず、非常に人里に密着した生活をしているが、土地利用では人為的環境に高い執着を示す季節とそうではない季節がある。これは森林の食物環境と密接に関係しているものと考えられる。